

高宇
等小佐
學校郡
郷土史
談全

特31

380

026188-000-9

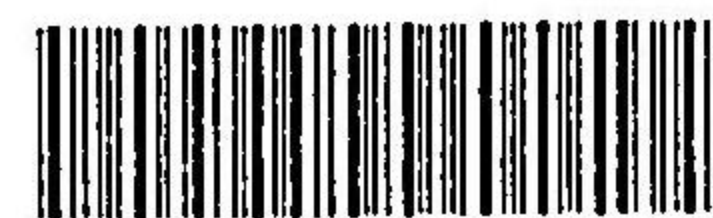
特31-380

郷土史談

入学 巳之助 / 編

M29

ADC-3873



宇佐郡郷土史談

宇佐郡

大古草昧ノ世ハ地形風土當ニ大ニ異ナル所アルヘント

雖古史舊記ニ乏シクシテ之レガ考證ヲ得ルニ難シ

神武天皇ノ世ハ國トナリ菟狹ト云フ其後存廢ノ史上ニ

見ユルナシ中古ニ至リテハ已ニ下リテ郡トナリ豊前ニ

属セシ大化ノ新政ニヨリ斯クハナリシナラン和名

鈔ニヨレハ當時野麻酒井葛原封戸向野廣山垣田高家深

見辛島ノ十郷宇佐ノ一驛アリント云フ

中古王朝ノ衰フルニ及ヒテ諸侯國土ヲ私シ全ク封建ノ

世トナレリ其際此地ハ今川大内大友ト所属ヲ移シ遂ニ

戰國トナレリ大友氏亡ヒテ黒田細川小笠原ノ三氏ニ移

リ享保中奥平氏ノ領地トナリ以テ明治維新ニ至レリ其
間千有餘年ヲ經テ中古ノ郷名ハ自然廢レテ今ヤ其ノ何
レノ地タルヤ詳ナラサルモノ少カラズ
封建時代ノ村名ハ左ノ如シ

清水、木部、今仁、佐野、大根川、赤尾、猿渡、山下、元重、末村、木内、
今成、中村、黒村、山袋、麻生、山口、宮熊、富山、敷田、庄、高村、時枝、
高家、乙女、尾永井、住ノ江、沖ノ洲、今井、中須賀、江島、川邊、畑
田、森山、荒木、城、葛原、石田、上田、芝原、辛島、法鏡寺、樋田、中原、
別府、大塚、閣、吉松、四日市、山本、拜田、矢部、香下、北山、沖、小坂、
廣瀬、櫛野、二日市、新洞、三沓、高並、船木、灘、岳ノ首、小野河内、
小稻、大重見、副、大副、落狩倉、上納持、平原、瀧貞、小平、栗山、岡、
大坪、龍王、平山、新貝、舟板、境坪、番木、佛木、村部、川底、惠良、土

岩屋、田平、荻迫、臺、羽馬禮、和田、來鉢、西稚屋、山城、原口、五名、
日ノ岳、大門、月ノ股、定別當、野地、宮原、景平、齊藤、有徳原、温
見、田所、福貫野、寒水、元村、山ノ口、疊石、内河野、水車、廣連、矢
上、上ノ畑、衾屋敷、西光寺、大村、鳥越、妻垣、庄、上庄、大口田、松
本、今井、筌ノ口、野山、森村、川崎、板場、五郎丸、六郎丸、萱籠、東
稚屋、若林、尾立、東惠良、榎本、下榎本、口ノ坪、廣谷、笹ヶ平、古
川、矢津、大見尾、塔尾、長洲、蟻木、松崎、高森、金屋、佐々禮、大堀、
宇佐、小向野、橋津、日足、岩崎、和木、出光、金丸、西屋敷、江ノ熊、
両戒、山村、西木、立石、辻村、榎林、青森、苅宇田、熊村、水崎、房ヶ
畑、内河野、山藏、矢崎、佐田、且尾、久井田、飯田、古市、餘、原村、新
原、木裳、南毛、下市、折敷田、大佛、上市、辻、恒松、田ノ口、中山、平
ヶ倉、正覺寺、

以上二百三十一箇村ニテ石高七万五千八百九十九石
三斗六升八合五勺ナリ

廢藩置縣ノ際小倉縣ニ属シ明治九年小倉縣廢セラレテ
大分縣ノ管轄ニ歸セリ此際尙封建ノ餘習ヲ存セシガ明
治十一年郡制ヲ布キ麻生貞樹氏初メテ本郡ニ長タリ二
十八年ニ至リ當時ノ郡長淵野氏トナレリ
明治二十二年郡内ニ町村制ヲ實執シテ町村名等モ非常
ノ變革ヲ生シ遂ニ當今ノ如ク三町二十七村トナレリ

大古

思津姫湍津姫市寸島姫姉妹三人天照大神ノ詔ニヨリ
初メテ此地ニ降臨セリ以上日本紀ニ見ユ

古事記ニヨレハ此ノ三女神ハ天照大神素盞雄尊ニ感シ
テ生ミ給ヒシ神ナリ曰ク

こゝよ各天の安河を中よ置きてうけぶ時よ天照大御
神先つ素盞雄尊の佩せる所乃十拳の劔を乞むて三段
よ打折りてぬなともよゆらよ天の眞名よ振り注きて
をがみよ嚼みて吹棄つる狭霧よ三柱の女神を生ミ給
へり

日本紀景行天皇ノ紀ニ曰ク

八月幸筑紫有賤賊者一日鼻垂妄假名号山谷響聚屯結
於菟狹川上其所據要害之地故領眷属爲一處之長悉捕
誅之

大古ニアリテハ此等兇徒所々ニ群聚シテ別ニ一部落ヲ

ナセリ所謂酋長是レナリ然ルニ右三女神初メテ此地ニ
降リ此等酋長ニ君臨セシガ尤モ崇敬ヲ受ケシナラン之
ヲ尊ヒテ道主ノ神ト稱セリ宇佐宮ノ第二社及ヒ妻垣神
社ハ之ヲ祀レル所ナリ今郡内各地ニ殘存セル岩嶮ハ蓋
レ此等神人及其臣民ノ住居セシ家屋ノ遺跡ナランカ

菟狹津彦

菟狹津彦命ハ吾宇佐郡ノ祖神ニシテ其以前數代ノ間既
ニ此地ニ住セシナリ其先ハ高魂尊ヨリ出ヅ天三降命嘗
テ天孫ニ從ヒ日向高千穗峯ニ降リシコトアリト云フ下リ
テ菟狹津彦ニ至リテハ巳ニ郡内ニ君臨シテ之レガ酋長
トナリ其勢力頗ル盛ナリシナリ神武天皇東征ノ帥ヲ起

シ薩ヲ平ケ火ヲ征シ進ミテ宇佐ニ幸シ給フ時ニ國神菟
狹津彦菟狹津姫兄妹出テ迎ヘテ菟狹川ノ上ニ一柱騰宮
ヲ建テ天皇ヲ饗セリ

此宮跡ニ就テハ高栖妻垣拜田トノ三説アリ近年南氏
拜田ナリト稱シテ此地ニ石碑ヲ建テタリ

此時菟狹津姫ハ天皇ノ御意ニヨリ天種子命ニ嫁セシト
云フ中州平定スルニ及ヒ天皇菟狹津彦ノ功ヲ賞シテ菟
狹ノ國造トナス是レヨリ子孫永ク此土ヲ領シテ深ク忠
勤ヲ皇室ニ致セリ

其後十三世ヲ經テ武雄ニ至リ初メテ宇佐ノ公ノ姓ヲ賜
リ從五位下ニ叙セラル蓋シ當時時勢已ニ一變シテ從來
ノ國造伴造等悉皆廢セラレテ天下悉ク郡縣ノ制トナリ

シカハ朝廷武雄ニ姓ヲ賜ヒ位ヲ授ケ以テ之ヲ優侍セシ
ナラン是レ宇佐氏ノ祖ナリ

宇佐 八幡宮

宇佐八幡宮ハ宇佐町ノ東南龜山ニアリ三個ノ宮殿屹ト
シテ其絶頂ニ聳ヘ中央ニ比咩大神ヲ祀リ西ニ應神天皇
東ニ神功皇后ヲ祀ル何レモ官幣大社ニシテ毎年三月十
八日ハ其祭日ナリ景内幽邃規模宏壯一タヒ此内ニ入レ
ハ神嚴ノ氣凜トシテ襲來ルヲ覺ユ實ニ千古ノ靈社ナリ
遠ク溯リテ之ガ起原ヲ探クルニ其大分ハ奇怪ノ説ヲ以
テ充タサレ眞面目ニ之ヲ筆スルニ堪ヘズト雖モ何レノ
神社佛閣モ其縁起ニ至リテハ蓋シ如此ニ過キズ只之ニ

ヨリテ其神社佛閣ヲ創メタル策士ノ胸中窺ヒ知ルヘキ
ノミ

元明元正ノ頃小倉山ノ麓ニ一人ノ老翁アリ容姿尊嚴風
骨幽邃實ニ神仙ノ相アリ号シテ比叢ト云フ其何國ノ人
ナルヲ知ラス飄然來リテ此地ニ留マル翁功成リ名遂ク
ルノ後又飄然影ヲ失ヒ遂ニ其終ル所ヲ知ラスト云フ宇
佐宮ノ古記録ヲ見ルニ之ガ創立ノ功ハ蓋シ此老翁ニ歸
セサルヘカラズ中ニ云ヘルアリ曰ク

欽明天皇三十一年辛卯の歳二月十日癸卯の日豊前の
國宇佐郡菱形の池の邊よて應神天皇の御靈大神比叢
に託して始めて神と顯えれ給ふ是れより前同國下毛
郡野仲郷の靈地よ於て宇佐公池守と云ふ人よ神告あ

り又後よ宇佐郡の神山よて靈異を示し給ひ或は同郡馬城の峯よて神光を放つなど凡て様々の神異ありき然れとも未だ社殿を建立し奉らず公家祈禱の事ある時は翁よ托して神事を執り行てしめ給へり元明天皇和銅元年奇瑞の鷹あり飛ひて宇佐川東岸の松樹に集る往來の人五人行けば三人死し十人行けば五人死す翁復來りて辛島勝乙目と共に齋戒すること三年にして誠心祈り申し、時夜間空中よ靈音ありて鎮坐なくして神慮安らさる由告げ給ひしかば同五年神託を奏し敕定を受けて神殿を造立し神事を勤行せられしとぞ和銅五年より鷹居の瀬の社よ鎮座まししくけるこれ

より五年ありて元正天皇靈龜二年より又小山田の社よ御移りありて十年御座しまた靈龜七年よ託宜し給ひけるは我今鎮座する小山田の社は其地狹隘し菱形山に移らんと願ふとありしかば年を経て後聖武天皇の神龜元年に豊前の守男人從六位下藤井連毛人勅ヲ奉りて小倉山よ神殿を造り奉る

稱徳天皇神護景雲年中又大尾山に移る

小倉山ハ即チ菱形山ニシテ今時神宮ノアル龜山是レナリ大尾山ハ龜山ノ東隣ニシテ古代ノ宮跡今尙存ス此ニヨリテ之ヲ觀レハ稱徳ノ御宇一旦大尾山ニ移リタレトモ蓋シ故アリテ後復小倉山ニ歸リシモノナラン當時小倉山ニハ三女神ノ鎮座アリシカバ二社ヲ一處ニ合セテ

一神宮トナセリ古記録ニハ尙記レテ曰ク

第三殿ハ大帶姫尊則神功皇后の御事なり

嵯峨天皇の弘仁十一年ヨ神託有りて同十四年癸卯の

とし始めて鎮座し給ひしとや

三座ノ神社已ニ嚴トシテ備ハレリ是ニ於テ宇佐公池守

ヲ推レテ官司トナシ八幡宮ニ奉仕セシメタリ蓋シ宇佐

氏ハ舊來ノ國造ニシテ其門地名望尙地方ノ信任ヲ繫ク

ニ充分ナリシカハ之ヲ推レテ官司トナシ八幡宮ノ威尊

ヲ固メタルモノナランカ其子孫永ク官司トナリテ今ニ

其職ヲ襲ケリ

此宮昔ヨリ神田封戸モ甚ダ多カリシガ壽永年間緒方維

榮ニ燒カレ永録天正ノ際大友義鎮ニ毀タレ尋テ豊臣秀

吉悉ク神領ヲ沒收シタルヲ以テ邦内有數ノ神社モ今ヤ

衰微ヲ極シ社殿殆ンド荒廢ニ歸セントス其後黒田如水

細川忠興等神地ヲ献シ宮殿ヲ立ツ徳川家光新ニ千石ノ

神領ヲ寄附セシニヨリ僅ニ舊觀ヲ復スルコトヲ得タリ

宇佐宿尼

第一平田井手

和銅以來宇佐氏世々宇佐八幡宮ノ官司トナリ遂ニ傍近

各地ヲ領有シ地方豪族ノ首位ヲ占ムルニ至レリ其間時

ニ盛衰ノ變ナキニフラスト雖中古王朝ノ政權ヲ失フニ

乘シ地方ヲ開キテ益莊園ヲ擴メ其領士數郡數國ニ亘リ

一個ノ大名ヲ形成セリ宇佐公通ニ至リ最モ盛ヲ極ムト

云フ別府平田等ハ公ノ開闢セシ所ナリ公通宇佐公ノ姓
ヲ改メ宇佐宿尼トナス公通居テ平田〔今ノ八幡村森山〕ニ占メ平清
盛ノ末女ヲ娶リ姻戚餘威ニ藉リテ勢九州ヲ壓セリ
平治年間公通新ニ邸宅ヲ構ヘ園池既ニ成リ未ダ其水源
ヲ得ザリキ一夜白蛇アリ驛館川ヨリ蜿蜒匍匐シ去リテ
園地ニ入ル公通覺メテ大ニ悟ル所アリ時ニ頻年旱魃ニ
逢ヒ民大ニ之ニ苦シム是ニ於テ公通愈々驛館川ヲ引キ
園池ニ入レ餘水ハ悉ク傍近ノ水田ヲ養ハシメント欲シ
領内ノ人民ニ命シテ賦役ヲ出サシメ工事ニ着手セリ今
殘ル所ノ平田井手是レナリ
抑モ平田井手ハ其堰豐川村中原ニアリ河西部ヲ蜿蜒流
レテ下毛ノ境ニ至ル全長殆シト五里水田ヲ養フテ六百

五十余町郡民ノ過半ハ生活ヲ此ニ資レリ實ニ宇佐郡中
最モ大ナル井手ト謂フヘシ今ヤ其人亡ビ邸宅荒廢其ノ
跡ヲ止メスト雖モ公ノ事業ハ烈トシテ千古ヲ照セリ

第二緒方氏ノ來擊

壽永二年平氏安德天皇ヲ奉シテ西下シ九月初旬宇佐八
幡宮ニ詣リ冥助ヲ祈ル初メ平氏都ヲ逃レテ各地ニ流離
シ遂ニ筑前ニ至リシモ緒方氏ノ爲メニ逐ハレテ身ヲ容
ル、ニ所ナカリシカ已ムヲ得ス此地ニ來リシナリ蓋シ
宇佐八幡宮司公通ハ清盛ノ末女ヲ娶リ領地モ豊前豊後
ノ各所ニ蔓リ勢力稍盛ナリシヲ以テ平氏之ヲ恃ミ來リ
テ公通ニ倚レルナラン緒方維榮復之ヲ聞キ宇佐氏ノ平

高等小學校 雜 土 史 記

氏ヲ援クルヲ疑ヒ怨ムルヲ甚クシ翌元曆元年七月遂ニ
兵ヲ率ヒテ來リ攻ム元曆文治記ニ曰ク

惟榮者神領緒方庄之庄司也年來隨社命之處治承四年
打止上分米已下濟物現社敵之間大官司公通爲問答子
細所下遣辨官田部妙盛也惟榮成遺恨可殺害公通已下
神官等之由稱之可亂入宇佐之由有其聞之間豐前國城
井兵衛尉種遠公通子息公房男也爲公通方人姨田村狐坂構城廓元
曆元年七月一日種遠同聳公房率大勢令籠彼城之處同
六日之曉惟隆惟榮惟憲已下之軍兵押寄狐坂令追落種
遠等畢同日末尅惟隆惟榮等從彼城向于宇佐其勢如雲
霞權擬大官司實輔少官司政直并御杖人已下神人等捧
御輿向于松隈之辻雖防之敢不憚亂入官中寺院或犯甲

御服神寶或損失佛像經卷惡行至極之間於于內院忽死
者三人出來畢凡留三個日之間燒拂堂舍人宅畢其時社
家公驗神官所帶之文書等大略搜執畢此間公通以下神
官逃籠橫山之山畢同九日惟榮等出宇佐同二十七日寄
種遠城井之城數個日雖致合戰不逼落之間同八月十八
日惟榮已下之軍兵販于宇佐畢公通已下之輩城井合戰
之跡各雖還住恐彼凶徒等公通并神官社官僧陰居深見
之山林畢同二年二月二日鎌倉殿源賴朝御舍弟參河守
殿範賴朝臣下着于宇佐同五日奉幣憑彼權威神官所司
等從山林出畢參州殿歎社頭寺院之損破哀社官寺僧之
放埒被下麻布六百三十端畢

三十六士

足利氏ノ世吾宇佐郡ハ周防ノ大内氏ニ属セシガ土地險僻ニシテ遠ク本國ヲ隔テタリシカハ其政治偏ク達セズ殊ニ末世ニ及ビ國勢ノ振ハザルニ乘シ此ノ土ノ地頭領主ハ各其ノ土地人民ヲ私有シテ殆ンド獨立シ皆小諸侯ノ姿ヲナセリ豊前志載スル所其ノ數三十余ニ達ス之ヲ宇佐郡ノ三十六士ト云フ

宇都宮綱房

建久年間後鳥羽天皇ノ宣旨ヲ以テ豊前ノ國司トナリ以來一族悉ク此ノ地ニアリ文治元年源頼朝宇都宮信房ヲ本内ノ守護トナス綱房ハ信房ノ弟ニシテ佐田ニ築キ子孫世々之ニ居ル

城井右馬允房統

天文年間妙見山ニ居ル

古賀郷六郎清晴

天正ノ際龍王村神樂ノ城ニ居ル

原田伊豫守種奥

天文ノ頃高森ノ城ニ居ル

中島氏

承久ノ頃〔一説ニ延應トモ云フ〕中島伊豫守宣長高家村中島城ヲ築キ子孫十五世ノ間之ニ居ル

時枝左馬介

應永ノ際時枝城ヲ築キ之ニ居ル

赤尾氏

貞和六年筑前原田氏ノ一族赤尾次郎左衛門尉種綱赤尾村光岡城ニ來リ子孫世々之ニ居ル

佐野氏

宇佐氏ノ餘流佐野氏佐野村土居城ニ居ル天正十一年佐野源左衛門ニ至リ大友氏ニ亡サル

麻生氏

世々麻生村高尾ノ城ニ居ル永祿九年麻生攝津守親政大友家ニ反シ遂ニ之ヨリ亡サル

渡邊氏

世々小倉ノ城ニ居ル渡邊氏ハ元備後國山田ノ城主ナリ應永ノ頃伊惣右衛尉弘茂ニ大内義弘ヨリ今市ニテ三百貫ノ地ヲ與ヘ世々居ラシメタリ

深見河内守

深見大村ノ城ニ居ル

惠良左京亮

羽馬禮ノ城ニアリ

田代氏

西光寺ノ城ニ居ル

德野尾十左衛門尉

上納持ノ城ニ居ル

櫛野和泉守

櫛野ノ城ニ居ル

矢部近江守高朝

矢部ノ城ニ居ル

横山武藏守未實

山下ノ城ニ居ル

平田玄賀

尾永井ノ城ニ居ル

今仁主水

今仁城ニ居ル

内尾掃部久重

清水ノ城ニ居ル

萩原土佐守鎮房

宮熊ノ城ニ居ル

副甲斐守

上副ノ城ニ居ル

津久見丹波守

六郎丸ニ居ル

萩原山城守種親

天正ノ頃敷田ノ城ニ居ル十七年黒田家ニ降ル

戦國ノ世諸侯攻伐ヲ事トシ遂ニ右ノ諸豪族ヲ出セリ大

内氏亡ビテ此ノ地ハ常ニ大友毛利二氏ノ競争場トナリ

前記ノ諸士二黨ニ分レ或ハ歎ヲ毛利氏ニ通ズルアリ或

ハ好ヲ大友氏ニ修ムルアリ宇佐郡記其際ヲ記スルアリ

曰ク

麻生攝津守親政永祿九年大友家ニ背キ高尾城ニ籠ル

北口、高並口、櫻岳口、深水口、其ノ餘其處彼處ニ軍兵ヲ置

キ奥野ニ馬ヲ乘回シ市河原ヲ陣所トシテ宜坂ヨリ狼

烟ヲ揚グ大友方ニテハ赤尾ハ早田山ニ柵ヲ結ビ元重
ヲ本陣トス中島ハ小倉原ニ陣シ皇后石ニ幡ヲ揚ゲ大
友ノ加勢糸口原車坂轟橋ニ充滿セリ成恒ハ深水ノ昆
沙門堂ニ陣シ三方ヨリ押寄せテ攻メ落セリ
豊前國宇佐郡時枝領主時枝平太夫鎮繼ハ兼テ毛利氏
ニ志ヲ通シケルガ天正八年ノ頃ヨリ佐野親重ト心ヲ
合セ中島ニ合戦度々ニ及ビケリ同十三年ノ春時枝密
ニ防州ニ使テ遣シ加勢ヲ乞ヒケレハ小早川隆景指圖
シテ内藤某ニ百五十騎ヲ添テ時枝ニ遣シ豊後ノ通路
ヲフサギケリ中島伊豫守安カラヌ事ニ思ヒ同苗主殿
ノ介吉村兵部丞ヲ先鋒トシテ三百餘騎ニテ時枝ニ押
寄せケレハ時枝ハ思ヒ掛ケナキ事ト云ヒ内藤ノ軍兵

モ即今防州ヨリ渡海シテ未ダ合戦ノ用意ヲナサザリ
ケレバ甚ダ遠テ立テ防戦ス中島ノ軍兵得タリカシユ
シト打テテカ、ル時枝勢サン、ニ討タレケル負ケ
色ナレバ落テ行クベキ用意ト見エシカバ中島勢是テ
見テ一騎モ殘サシト切テカ、ル去レテ平太夫ハ城中
ヨリ忍ビ出デ防州サシテ落行キケリ伊豫守ハ一戦ニ
打勝テ首級二百三十級討取ケレテ鎮繼ヲ討モラシ無
念ニゾ思ヒケリ頃ハ天正十三年十月二日ノ事ナリ此
ノ事豊後ニ注進シケレバ義統ヨリ宇佐郡司職タルベ
キノヨシ中島伊豫守ニ感狀ヲ賜ハリケリ
當時宇佐郡ハ大友氏ニ属シタレテ或ハ心ヲ他ニ寄せスル
モノモ少カラズ動モスレバ大友ノ羈絆ヲ脱セントスル

風アリキ天正十六年黒田氏ノ此地ヲ領スルニ及ビテ大ニ土豪ヲ征シ威武ヲ以テ領内ヲ壓伏セリ然ルモ強頂ニシテ尙腰ヲ黒田ニ屈セサルモノモアリキ中津曆史ニ云フ

上 天正十七年三月一日時枝十太夫ヲ嚮導トナシ三千余騎ヲ以テ宇佐郡高家城ヲ圍ム城兵上下七百五十黒田ノ前軍城下ニ達スルニ及ビ射戦稍久シクシテ城將中島雅樂允、同彈正忠高、玄蕃允等百四十余人門ヲ開キテ突出シ奮戦大ニ黒田ノ先鋒ヲ破ル既ニシテ諸將終ニ皆死傷シ而シテ黒田ノ兵益迫ル時ニ城將統次樓門上ヨリ指揮セシガ城兵悉ク敗走セルヲ見怒リテ三人張ノ強弩ヲ操リ長政ニ注ギテ之ヲ射ル矢長政ノ鎧袖

ニ中ル長政懾レテ後陣ニ退キ兵ヲ更代シテ疾ク攻メシム統次乃自ラ出テ、戦ハントス恒吉縫殿允其大友氏ニ倚ルヘキコトヲ勸ム仍テ夜竊ニ向野ニ走リ其外戚松尾民部ノ宅ニ入ル民部之ヲ黒田ニ告グ追兵來リテ之ヲ圍ム統次民部ノ反覆ヲ怒リ忿激出テ戦テ敵ヲ殺シ屠腹シテ乱槍ノ間ニ死セリ是ヨリ先小倉ノ城主渡邊鎮弘世々大友氏ノ旗下ナルヲ以テ敢テ黒田ノ命ニ服スルヲ欲セス巖然籠城ノ備ヲナセシガ三月五日長政兵ヲ分テテ二トナシ一ハ糸口原ヨリ一ハ木行坂ヨリ進ミ城ヲ圍ミテ之ヲ射ル城主統政精銳數十人ト共ニ門ヲ開キテ突出シ直ニ長政ノ麾下ニ進テ短兵急ニ接戦ス長政懾レテ退キ遙ニ之

ヲ圍ムコト數重以テ之ヲ苦ム統政事終ニナスヘカラ
サルヲ知リ將ニ自殺セントス其ノ時山下傳六兵衛利
害ヲ陳シテ降ヲ勸ム統政之ヲ容レ使テ遣シテ其意ヲ
述ブ長政直ニ之ヲ許シ陣ヲ時枝ニ移レテ酒ヲ將士ニ
賜ヒ之ヲ勞ス偶士岐修理允、赤尾源三郎來リ降り尋デ
土井ノ城主萩原種親亦降ヲ乞フ長政皆之ヲ許レ遂ニ
軍ヲ中津ニ班ス

貞女市

驛川ノ上和尙ノ陰ニ一小碑アリ碑面題シテ貞女市ノ墓
ト云フ境内數歩ニ過ギズト雖數株ノ松樹アリテ碑上ヲ
庇蓋セリ其蔚蒼トシテ翠色常ニ滴フントスルハ正ニ市

女ノ節操ノ掬スベキヲ表セリ三浦安貞先生曾テ愉惋錄
ヲ著シ之レガ傳ヲ載セタリ曰ク

市女ハ豐前國御許山の陽矢部村彌平といふ者の妻也
彌平貧く獨ある母も目じひ其身も程なく人の厭ふ病
よ沈ミ目鼻穿ち手足爛れ怪しくいふせき形となりさ
らぼひよよへる狀外目たよ忍ひ難き坂市女志彌々固
く病を看とりする暇晷ハ彌平の幼き弟あるを携へ終
日耕し草ざり夜ハ白づきつゞれさし甚ぬるひまも稀
よ二人をばごまゝ養ひけり彌平其勞を見るに忍びず
或時枕許に招き汝我に替り母よ能く仕へ我見苦しき
を厭えず多年淺からぬ志謝するよ處なり宿病由うく
愈なん事有るをからず此の上ハ家よ歸り其うさ忘る

と方も人乃言よ任すへー云々と云れければ市聞て涙
を流し我此家よ來りしより誓て他よ適の志なし君無
事の日ハ相うひ參らせ君疾る日ハ見捨參らせんなど
さもしき心はへあらんやとてうけひかず彌々厚く仕
へけるか弟も又兄の如き病を得獨の手弱女よ病さら
ぼへるを養ふにそ素より糧とすべき物もなく是より
宇佐へ行程一里計岩坂とて峻しき道あり是を薪こり
日よ二度つゝ越へ米鹽やうの物調へ飢を凌ぎける寛
保辛酉の秋彌平空くなりければ市死體よ取りつき痛
哭の聲隣を動かす葬營むべき貯もふく彼是かり求め
て其事も終ぬ程なく盡七日よもなり縁類の人とも參
り追善の事終て市が孝貞世よ類あらされどもかくて

月日を送むよは何ーか人の門にも立なん此上て故郷
よ歸れかしとすゝめける市けぶがる顔して心得ぬ事
どころ承るものなれ目しひの姑疾る小ーうとあり朝
夕の烟も我なくば誰らすゝかん夏の署冬の寒も我な
くば誰か扶むたとひ身乞兒と成とも是を捨て何國よ
行むとて操たゆまず明し暮しける新玉の春は近けど
も姑に供む物もな一家の一柄の鍬を餘せり是を典し
て錢八十文を得あり此直にて鹽を求め若鹽とて貧き
者よすなる業よ益よ載せ家毎よ初春の壽をするよろ
里人哀れに勝で米粟など報ひたるを種まし野面川面
の草あざり辛うして其春も渡りぬ去程よ其苦節清操
世よ傳へて中津奥平侯に聞へける侯潛に人をして其

狀を窺いむるよ路よて破れたる衣穿る草鞋にとんの
髪打乱して薪を載て市へ行を見耕する男に問ハ孝女
市と答ふ依て其家に到て見るよ雨露をだよ禦きやら
ぬあばら家よ二人の者疾よあり市今日調へたる物を
煮炊すよむる状色和し容うやくく宛も賓主の如
し急き歸り具に達しけるよ類なく感じ賜ひ米若干
賜り盡れば又有司に告よと重き恵を受るも今は昔語
となりぬ

市女明和五年ヲ以テ卒ス其後藩主奥平昌高此事ノ終ニ
泯ビンコトヲ歎シ文化四年石碑ヲ墓地ニ建テ且家臣ニ
命シテ詩歌ヲ作ラシメ輯メテ一卷トナシ永ク之ヲ世ニ
傳ヘタリ侯モ亦歌ヲ詠シテ曰ク

母よつかへ夫にまことありし賤の女が
こゝろを人乃めであがぬかも

赤尾丹左衛門

丹左衛門ハ實ニ一草賊ナリ其罪固ヨリ恕スベカラス然
リト雖當時ノ時勢ニアリテ彼レ一身ヲ抛テテ騷乱ヲ企
テタル萬已ムヲ得ザルニ出ツルナリ此際ニ處シテハ彼
レノ位置彼レノ境遇實ニ騷乱ヲ措キテ他ニ良策ナキナ
リ其記録ヲ讀ムニ其事情眞ニ憐ムヘキモノアリ中津歴
史之ヲ記シテ曰ク

文化九年二月十日宇佐郡赤尾村農夫赤尾丹左衛門乱
ヲナス始メ丹左衛門ノ父丹治ナルモノ常ニ郡内ノ早

損ニ苦ムヲ憂ニ藩廳ニ建言シテ領内ノ正租ニ五ヶ年ノ加稅ヲナシ之ヲ以テ資金ニ供レ郡内ニ水功ヲ起ス

此水功ハ香下井手ト稱スル小事業ナレトモ全長二里余水道悉ク岩石ヲ穿テタル墜道ニシテ今ヨリ之ヲ思フニ實ニ困難ナリシナラシ

然ルニ爾後五年ヲ經過セシモ藩廳猶其利ヲ貪リテ加免ヲ除カズ仍テ領民竊ニ不平ヲ訴フレトモ容レラレス遂ニ無智ノ小民等ハ却テ丹治ヲ怨望スルニ至ル是ニ於テ丹左衛門其狀ヲ視ルニ忍ビス自一身ヲ擲テ父ノ冤ヲ雪カント欲シ此日同志數十人ト共ニ中津藩廳ニ迫リテ強訴セントセシカハ當時領内皆奸吏ノ非道ヲ惡ミ且ツ賦歛益重キヲ加ヘラレ流離困頓其父母妻子ヲ顧ルノ違ナキ時ナルヲ以テ賤民之ヲ傳ヘ聞キテ忽テ四方ヨリ集リ來リ遂ニ一揆トナリテ行ク

道ニ亂暴シテ遂ニ上毛郡ニ入り中村ノ庄屋ヲ毀テ廣津ヨリ山國川ヲ涉リテ城中ヲ襲ハントス仍テ藩廳兵數隊ヲ外馬場川原ニ出シテ之ヲ防キ党民數十人ヲ殺傷シテ之ヲ逐散ス後丹左衛門以下首魁捕ハレテ刑ニ死ス然ルニ此一揆ヨリ苛政稍緩良ニ赴キ閩藩ノ人民一時大ニ丹左衛門ノ德ニ浴セリト云フ

御許騒動

明治元年正月十四日長州ノ浪士佐田内記兵衛平野四郎柴田直次郎等六十余人俄然長洲港ヨリ上陸シ直ニ四日市ニ來リ代官所當時久留米藩ノ警衛中ヲ襲ヒ吏ヲ追ヒテ宣衙ヲ火ス尙東本願寺及ヒ庄屋渡邊氏ノ邸ヲ燒キ自ヲ花山院ノ命

ナリト稱シ器具ヲ掠メ糧食ヲ奪ヒ御許山ニ據ル翌十五日總督清原靜麿以下天野五郎平野四郎長四郎高木右門菅野五郎佐田内記兵衛等數人ノ名ヲ署シ檄ヲ四方ニ飛バシテ諸藩ノ向背ヲ問フ時ニ四方皆小藩ナリシカバ之ニ答フル所ヲ知ラズ上下震駭セリ僅ニ中津藩兵二隊ヲ出シテ笠松村ニ屯シ動靜ヲ窺フノミ浪士等中津藩ノ膽ヲ試ミント欲シ二十日花山院ヲ長州ニ迎フト聲言シ五十余人鼓行シテ西ニ途ニ笠松村ヲ過ク中津藩ノ兵遂ニ一矢ヲ放タズ是ニ於テ浪士等諸藩ノ與シ易キヲ悔リ暴横到ラザル所ヲク毎夜出テ、四方ヲ掠略セリ二十一日別ニ又長州之兵西豐前ヨリ來リ御許山ニ向ヒ銃戰頃刻終ニ賊ノ巢窟ヲ屠リ平野四郎佐田内記兵衛等數人ヲ斬

リ之ヲ四日市ニ梟シ忽ニシテ平定ノ功ヲ奏セリ之ヲ御許騷動ト云フ

因ニ曰ク佐田内記兵衛ハ本郡佐田村大庄屋ノ子平野四郎ハ肥前大村ノ藩士ナリ何レモ壯時逃レテ長州ニ行キ奇兵隊ニ入レリ幕長ノ戰爭以來過激ノ言ヲ吐キ藩論ヲ屑シトセス國ヲ脱シテ此ノ地ニ來リ騷動ヲ起セレモノナリト云フ

明治ノ人物

明治ノ世ニ至リテハ人物亦少シトセス政治家ニハ大井憲太郎是恒眞揖軍人ニハ麻生武平官吏ニハ横田國臣樋田魯市山中幸義實業家ニハ辛島祥平南一郎平等ノ名士

高等小學校
進出
史談

前後輩出セリ其ノ事績ノ如キハ此ノ小冊子ヲ待タズレ
テ世人ノ能ク知ル所ナレハ殊更茲ニ書セズ

宇佐郡郷土史談終



明治廿九年八月六日印刷
明治廿九年八月廿日發行

大分縣豊前國宇佐郡長洲町八百四十四番地

宇佐郡高等小學校
編輯代表者 入學巳之助

大分縣豊前國宇佐郡長洲町三百八十六番地

發行者 阪本棊次郎

